



『ABCの本』B5サイズのノートのような冊子です。英語を教え始めてすぐに配布するものではありません。英語の歌やライムを楽しみ、英語での問いかけにも身振り手振りを加えて答えることができるようになった頃、テキストなどを配布して名前を書くように指示をすると、「英語で書いていい？」と聞いてくることがあります。ローマ字で書いてもいいか、というつもりなのですが、「1年生が拾ってくれた時に読めるように日本語で書きなさい」と言うと「ええ、つまんないの」と不平を言います。その頃、子どもたちが自分流で英語を書きたくなっているのを見計らって、この本を配ります。

表紙をめくると、右側ページにこのアルファベットだけが並んでいます。ちょっと殺風景なページですが、この文字列をいろいろなリズムで読んだり歌ったりした後、「英語を書きたい？」と念を押すように尋ねます。その語調にびっくりしたようにこちらを見ている子どもたちに、「それじゃあ、この文字のお隣に同じように書いてご覧」と指示をします。お手本の脇に書くのですから、間違えようもありません。中高生になってもbとdの区別ができない生徒がいる、ということを目にしますが、このようにすると小学生でも大丈夫です。

「書けた！」という元気な声に、「じゃ、自分で書いたのも全部読んでみよう」と誘います。A, A, B, B, C, C... おや、2つ書いたの？全部読むのよ、H, H, I, I, I, J, J...書いたのは全部読みます。続けて小文字。Iはたくさん書いた子がいます。それも全部読みます。こういうことを面白がるのは4年生までですね。丁度3年生でローマ字を学習した後で丁度いいのだと思います。

こんなことだけでは英語を書いた気がしない、という頃を見計らって次のページに入ります。

A a

A a



a a

corn c p



table b n n



-3-

-3-

T t

T t



T t

ten tomato



helicopter match



-4-

-4-

26 文字の 1 字ずつを見開きページにし、左側のページには、その文字を含む単語を 4 つずつ選んで並べました。どの単語も子どもが既によく知っているものばかりです。この 4 つの単語を A のページから

Zのページまでめぐりながら、各ページの4つの単語を一緒に唱えていきます。唱え終わったところで、**How many letters are there in alphabet?**と尋ねると、もう一度ページを繰ったり、最初のページの文字を数えたりして、**26!**と答えてきます。 $4 \times 26 = 108$  すごいなあ、100以上も単語を知っているんだ!と驚いて見せると、子どもも、我ながらすごい!と納得しています。

「さあ、書きたい?」「うん、書きたい!」「じゃあ、絵の上にある字を読んでみよう」とさそって、**/corn/**、**/cp/**、**/tble/**、**/bnn/**と書いてある文字だけ読みます。途端に妙なことが起こります。さっきまで馴染みのある音が聞こえてきたのに、文字が抜けているところは音も抜けるとなると、実に間が抜けたこととなります。「やだあ。」「へんだあ!」という声が響きます。そこで、その大文字と小文字を、ページのトップにある練習するための4線上にきちんと書かせて、正しく書いているのを確認してから、抜けているところに書くように指示をします。練習したばかりの文字ですから、どの子どもも形を間違えることなく書き込むことができます。ただし、**banana**の最後の**a**を書き忘れていた子どもが必ずいます。子どもに聞こえよがしに**banan**と読むと、「え?」とこちらを見上げます。そしてなぜそういうことが起こったかを悟って、**a**を慌てて書き足しています。

未習の文字は実線で印刷してあり、既習の文字は点線をなぞればよく、新出の文字だけは練習してから記入する、ということになっているので、自学自習で十分に完成できる作業となります。文字を書くことを億劫がる子どもにとっても、負荷が少なく、間違いの起こりにくい作業です。

このような作業を、ゲーム感覚で続けていると、Zのページが終わるころには、子どもたちなりにフォニックスのルールを発見することができます。並行してテキストを使った活動も行っていますから、子どもたちの文字に対する感覚は鋭くなり、当て推量で、英語を読もうとする意欲が強くなっていきます。

右側の広いスペースには、そのページの文字で始まる単語を絵で描いて集めるのに使います。BやSのページは、外来語として知っている単語がたくさんあるので、絵でいっぱいになります。ところがN、Q、Xなどはなかなか埋まりません。その経験を大事にしていると、後々辞書を引くようになったときに、確かにSやBなどのページ数は多く、QやXなどのページが少ないことを発見し、納得がいくと思います。

Nで始まる単語が見つげにくい? そうでもないのでは? **notebook, nose, neck, necklace, newspaper, noodle, nurse,**と子どもたちが言ってくれるようにと思われるかもしれませんね。ほかに**nine**もあります。でも、B, T, S, Mなどに比べると、子どもたちはNで始まる言葉を探そうと、とても苦労しています。例に上がっている単語をみると**nine, notebook**のほかは、子どもたちは大体日本語で話していて、外来語として日常生活では使われていない単語です。ナースステーションと繋げると知っていても、ナースと独立させると、分からない子がいます。

このような作業をしながら、友だちと身のまわりの外来語を探しあうことで、語彙を豊かにすることができます。

#### ある公立小学校での実践報告

『ABCの本(ページュ)』の授業、第1回目を行いました。6年生です。

この本は、単に文字を書かせるのが目的ではないな、と感じます。聞く、言う、読む、書く、が同時進行していくように感じました。音と綴り、音声と文字が一致していて、無理なく子どもの学びを促してくれます。子どもたちは書きたくてしょうがない状態でした。